

私の校長先生

垣内 フミ子

武田学園長武田ミキ先生は、御年九十二才の生涯を静かに閉じられました。時に平成五年十二月二十七日午前七時五十分のことでございます。私達はいまだ茫然としているかのようです。改めて何とも大きな大きな働きをなさつて来られた事でございます。私達には到底解らない偉大なお人でありました。ペンを執るに当たり、先ずこの感嘆の思いが走ります。

先生の教育に対する信念の強さも想像を絶します。先生を魅了して止まない教育のお仕事で、「教育に生き、教育に死す」の信念を貫かれたのですから、大変お倅せであったと思っております。同時にまた、御苦労の方も如何ばかりか、きっと大きく、多く、計り知れぬものがおありだったと思われます。こうして常に並ではない努力と、先生の英知をもって取り組まれる教育のお仕事は、皆良い結果が生まれ、ミキ先生の創立になる可部女子専門学校は、その特色も実にはつきり現われてきて、自慢したい生徒ばかりのようにも思える位でした。先生の目指される教育方針に向かって、着実に一歩一歩突き進んで行かれていました。しかしその頃も先生は大変に重い病氣と闘いながらのお仕事なのですから、驚くほかありません。誰も真似の出来ない事で、不思議の一語に尽きるようです。

四、ミキ先生とともに生きて

先生はいつも多くの人々一人一人に変わらぬ厚い情を以って接して来られ、その真心が皆さんに伝わり、喜ばれ慕われ人も集まり、動く。今あの立派な学園を眺めまして、一入深く先生の人徳を感じ、不思議な力をお持ちであつた事を思い識るのであります。今にして解ることは、やはり学長の学千先生が何時も共に歩いて来られ、後に控えていらつしゃるといふ事と、大勢の先生方の日々のお務めとが大きな力となっている事でありましょう。先生がまだお若い頃の事ですが、時には単身、文部省に向われ、教育について御自分の考えなり、事情等を熱心に説き、話を聞いて頂き理解を求めていらつしゃつた事を伺い、感心して驚いたりも致しました。勲三等瑞宝章を戴かれたのは、何十年も前の事、その頃は非常に珍しい事で、その祝賀会には私達も晴れがましい気持で出席したのを覚えております。其の後も何度か勲章表彰状等戴かれました。何といつても女性では最高の宝冠章叙勲の榮に浴されたい事は、これまでの功績にも華が咲いて、先生は一番お悦びになられたのではないのでしょうか。ほんとおめでたい事でございます。先生との御縁は、私が呉実科に入ったその三年間と、続いてこれまでの実に六十年近くにもなる長いものです。昭和二十四年四月から七年間は、可部女専で教鞭を執らせて頂きました。その時の思い出は山のように語り尽くせませんが、毎年の行事である、生徒の学習発表展覧会と呼んで盛大な催しは印象深いものでした。その時の先生は、各教室ごとに展示する生徒の作品などの総て調達する物は、全部図解入りで、びつたり合うように何處からどこへ何を幾つどう並べ、カーテンは机を被うのにどこから等々明記して渡され、それらベットの上的の作業ですから先生の頭の中はどうなつてゐるのかしらとびつくりするばかりでした。あの朝、思いがけない平田先生からのお電話は自分の耳を疑うような茫然とした気持の中で聞きました。そして我に戻り、驚き、何をしてもよいか解らなくなつてしまいました。嘘の様な悲しい日が来たのです。思えば、長い病床での生活も誠に

教育者らしく几帳面でお医者様の指示通り、一日も早い快復を待つて一生懸命でしたのに、本当に残念なことでございます。もう一度この春、暖かくなる頃少しずつでもお元気になって頂き、楽しい日々を過ごして頂きたかったものと、悔やまれます。いつか、私の家へも来て泊まって頂く筈でしたのに実現出来なかったのが悔やまれ、淋しい限りです。悲しい報らせを受けて、初めて可部線の電車に乗ると、ひしひしともうあの先生がいらっしやらないのだと実感として思い起こされ、これからもう一つとと思うと大勢の乗客の中で私は滲んで出てくる涙をこらえるのが精一杯でありました。「可部に行けばいつでも私の先生が居て下さっていたのです」、悲しくも過去形のこの言葉が、今私の胸を去来します。ついこの間のように思えるのですが、ベットで伏せていらっしやる先生が、「起こして…」と大下さんにおっしゃり、「ハイッ」とすぐ起こしてあげられたのですが、また「起こして」とおっしゃって、私が「先生、今起こして貰われたところですよ」と言うのと、その後一寸してくすぐすと声を出して笑われ、如何にも御自分でおかしかったのでしょう、そのお顔も久し振りに見る、目も輝いた童顔でした。昨年十一月のある日の事でした。二年に近い長い病床での日々はさぞ御苦痛でいらっしやったと思われれます。けれど、また一面お倅せん先生だとつくづく思ったものです。すべてが至れり、尽くせり、大変快適に、大事に大事に看病して頂かれましたのですから、実にお倅せだっただと思ってしまう。それに、学千先生を始め大事な方が皆身近においでになり、先生はどんなにかお心丈夫だった事かと思つています。そして三度のお食事も大下さん初め登根先生や皆さんが真心こめて、色々と品を変え味を変えてお作りになつていらっしやる様が、よくわかるようでした。

たいてい美味しいと少しずつでも、楽しみにして召し上がっていらっしやるようでしたけれど、御病人の事ゆえ、何時か私が尋ねた時「おいしくない…」とおっしゃり、悪かったのですが、おかしくなり、笑つてしまいました

四、ミキ先生とともに生きて

た。十二月にお見舞に上がる筈でしたのに、都合が悪くなって気になり乍ら果たせず、思ってもいなかった早い悲しみの到来が悔やまれてなりません。

幽明界まかいを異にして遙けくへだつこととなつてしまいました。けれど、ミキ先生は学千先生御一統様をはじめ武田学園ゆかりの総ての皆様を何日も見守り続けて下さるに違いありません。ミキ先生の御遺志はますます固められ、隆盛を末永くつづけられるものと信じています。思い出は色々で、とりとめの無い事を申し述べましたが、最後に懐かしいお呼び名「校長先生……」と呼ばせて頂いて、心から御冥福をお祈り申し上げますとともに、有難うございましたと申し上げてお別れ致します。さようなら……先生……